自分に正直に

魚類

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
自分に正直に

【Ｎコード】
Ｎ７９８４Ｆ

【作者名】
魚類

【あらすじ】
主人公である良丘克彦（よしおかかつひこ）は、１人でいるのが考えられなかった。何をするにも誰かがいないと耐えられない。そんな克彦に、それとはまた正反対の考えを持つ友達が現れる。その友達はずっといじめられて孤独しか知らなかった。その正反対の２人が親友になっていく。そして克彦は、誰にも言えない悩みを打ち明ける…。他の人とは少し違う感性を持つ主人公の気持ちを描く。

7回目の朝（前書き）

うまく書けなかったですがどぅか読んでください。

7回目の朝

「う～ん……１０時？……１０時！！！！」

遅刻だ。今の時点で既に１時間半、遅刻してる。家族には起こしてもらえず、アラームには無視された。

「なんで起こしてくれなかったんだ！あぁ～。」

と、呟きながら急いで着替えている。

ドタドタドタドタ……。

「階段は静かに降りてくれない？」

「静かに降りてきてもらいたいなら起こしてよ！…っとゆか、なんでまだ姉ちゃんが家にいるの？」

姉はテレビを見ながら煎餅を食べていた。ただのオバさんだ。

「文化祭の振り返り休日。」

「あぁ…。なるへそ。」

「とゆうか急げば？時間あれだよ。」

「わっわかってるよ！ってか、起こしてくれなかったんじゃん！」

「起きなかったのが悪いんでしょ。今、井戸端会議してる場合じゃないんじゃなくて。」

「……ムカつくな。」

朝シャン、ならぬ、朝井戸端会議。大体、この家での朝の儀式的光景。ほぼ毎日行われている。

「いってきます！」

バタン。

思いっきり扉を閉めて自転車にまたがり、学校に向かった。

着いたとき、丁度チャイムがなっていた。3時間目の。

ガラガラガラ。

「起立！礼！着席。」

日直の女の子が号令をした。

「はいっ。じゃぁ、出席を採るぞ。あら……」

「おくれましたぁぁぁ！」

「……」

教室中から、一瞬、音が消えた。

「……今、来たのか？」

「えっ。

はい！今来まし……じゃぶぁ！」

殴られた。しかも、ペンを持っていた方で。

「『えっはい！』じゃない！何やってるんだ！」

「しゅいましぇん。」

遅刻は、今年7回目。殴られたのは2回目だ。前もこいつだったような…。

「……もぅいい。座れ！」

「ひゃい…。」

ゆっくり起き上がり、先生について行くようにして席についた。

「はぁ…。出席をとるぞ。」

僕は、今日は3時間目からの出席。今までで一番遅れてきた。出席では返事を飛ばされ、授業が始まった。たった7回だが、もぅ既に遅刻野郎だと思われているみたいだ。

涙

「えぇ～16世紀前半、オランダが台湾を占領し…。」
授業が進み、黒板が埋まっていく。さっき殴られたせいで、授業はやる気になれなかった。

「ねぇ、かっくん。今日寝坊したの？」
　隣にいた美雪（みゆき）が、話しかけてきた。
「えっ、うん。そんなとこ。起きたら既に10時で。さすがに焦ったかも。」
「やっぱしぃ。かっくんって、寝坊助だね。」
　寝坊のイメージもついていたか。

　僕は良岡克彦（よしおかかつひこ）。17歳の高校2年生。身長は小さめ。部活は吹奏楽部。最近は科学部も掛け持ちしてる。兄弟は1人。ムカツク姉の廣己（ひろみ）。家族は後、お母さん（ママ）の紗季子（さきこ）だけ。お父さんは昔、離婚したとか。

まだ顔と名前が一致しない5月。この高校は2年目だが、今年は去年と違うコースを選らんだ。だから、周りはほとんど知らない。さっき話しかけてきたのは春岬美雪（はるさきみゆき）。おんなじ中学校だった人。

「遅れて学校来たのに余裕こいて井戸端会議か？」
　こいつも姉ちゃんと同じこと言ってる…。
「ったく。克彦は、仕方ないな。」
　克彦に近づいてくる守口。多分、また殴られる。
ゴスッ、スッ。

「ったぁぁちぃ！」
　殴ってしかも擦りやがった。
「やられるたんびに変な声出すな！」
「だったら、暴力振らないでくださいよ。」
「暴力じゃない！愛のムチだ。」
「……くさっ。」
ゴスッ、スッ。
「なぁぁぁ。」
クスクスクスクス……。
みんなに笑われた。まぁいいけど。

授業も一通り終わり、放課後の部活に行った。部活はもう慣れたものだ。部員は大体２５人くらいと少人数。やってる楽器はチューバ。今は部員集めもまだまだしつつ、６月にある文化祭に向け、日々練習しているところだ。

家に帰った。今日は１日が長かったような気がした。…学校には遅れたのに。
朝の事でママに話をしようと思った。けど、できなかった。携帯電話を手に持ち、力の抜けた姉を必死で慰めていたママがいた。姉は止まる気配のない涙を拭かずに、泣いていた。

姉（前書き）

つまらないかもしれませんが、よろしくお願いしまし。

姉

姉は高校3年生。
現在、受験生真っ最中。
だが、行きたい大学は決まってないそうだ。
そもそも、受験生が休日の大事な時間を、煎餅で過ごしてる時点でアウトだ。
受験勉強、と言うより、今はこそこそ学校に隠してやってるバイトや、いつもフラれるのに一生懸命付き合ってる彼氏の方に、力を入れてるみたいで。姉は今、演劇部に入っている。実力はそこそこらしく、県は余裕で抜ける程だとか。行きたい大学が決まらないときは、演劇で行くつもりだろう。相当自信があるようで。認めたくはないがホントにすごい。

廣己が演劇に入ったのは、中学校の頃だった。入った理由は1番の親友が演劇部だったからだ。
親友の名前は居田星花（いだせいか）。いつも廣己を助けてくれた心優しい女の子。
廣己は、中学生時代ひどくいじめられていた。原因は、盗みの疑いをかけられたからだ。たまたま教室にいただけで、疑われた。盗まれたものは結局、移動教室の時に他の机に入れっぱなしにしていただけだったらしく、見つかったのは9日後だった。盗人（ぬすっと）の疑いをは晴れたものの、もうその頃には手遅れで、いじめに変わっていた。
たった9日間で、廣己の生活は一変した。
今まで中の良かったはずの友人には無視されて、近づけば避けられ、靴や教科書をボロボロにされた。ただいるだけで冷たい目線を向けられ、声を出せば場の空気は重苦しくになった。
大体、その空気を作るのは仲の良かった友人達だ。
仲が良かったと思い込んでいただけかもしれない。

いや、そうだったのだろう。
先生ですら、助けてくれなかった。おかげで、誰も信じれなくなった。人間不信だ。学校に来るのはやめようか。そう考えながらも、学校には来ていた。でも、辛かった。自殺も考えた。けど、そんな勇気はなかった。毎日泣いていた。独り、暗い部屋の中で。孤独と戦った。でも、勝てなかった。学校が怖く感じた。

不登校になろうと決意して、帰っていた通学路。その時、後ろから誰かが話しかけてきた。
「ねぇ、一緒に帰らない？」
正直驚いた。普通に話し掛けられたのは何ヵ月振りだろう。嬉しかったけど、怖かった。
「私も帰り道こっちなんだ。一緒に帰ろう！」
何も答えられなかったけど、一緒に帰ることになった。その時、話しかけてきてくれた人が星花だった。

親友

「ねぇ、この服なんてどう？廣己にピッタリじゃん！」
「そぅかな…。」
　星花と2人で洋服屋さんにきていた。星花は私にあう服を探してくれている。
「この黄色とか……うん！ピッタリじゃん！やっぱ似合うと思ったんだぁ。」
「私、黄色好きだけど…着るのは…。」
「大丈夫！着てみて。ほらほら。」
「ぅうん…。わかった。」

最近は、いつも2人で行動している。帰り道で話しかけられて以来、星花はいつも私にかまってくる。
学校でも、気付けば廊下でいつも待っていた。
なんでいつもかまってくるのか。わからなかったけど、一人より楽しかったからいつも一緒にいた。一人でいる時、周りの視線を凄く感じたけど、二人でいたときはあまり気にしなかった。毎日のように二人で喋って、遊んで、笑った。私は、無二の親友だと感じた。
そう思った。そう信じたかった。だから、星花を信頼した。

「ねぇ星花。」
「なに？」
「あの時、どうして話しかけてきてくれたの？あの帰り道のとき。」
「……」
廣己の言葉に星花は少し笑った。
「私が話しかけた理由？決まってるじゃん。」
「…？」
「ただ単に……廣己と、友達になりたかっただけだよ。それだけ。

」
「…フフ。」
二人は笑いながら座っていた。廣己はその言葉が嬉しかった。本当に仲良しの親友だと思った瞬間だった。
教室は違うけれど、暇があれば一緒にいた。部活も同じ部活に入った。高校もわざわざ同じところを選んだ。みんなに裏切られてから、唯一信頼できる存在だった。離ればなれなんて考えられなかった。

高校三年。受験生真っ最中な姉。中学校以来、姉は強くなった。姉の弱いところは、中学生以来見ていない。そんな姉が泣いていた。止まる気配のない涙も拭かずに、泣いていた。今にも落ちそうな携帯電話を片手に、ママの腕のなかで声を荒げ泣いていた。なぜ泣いているのだろうか。その理由は、あまりにも単純で、あまりにも重すぎることだった。星花さんが、あんなに姉と仲のよかった、無二の友だとも言っていた星花さんが、さっき死んだのだ。

独りの思い（前書き）

今回は、本編とは少しだけ異なるので飛ばしてもいいところです。

独りの思い

静かな夕食。姉ちゃんは食卓にはいなかった。無理もないだろう。今日は星花さんのお葬式に行ったのだから。唯一の親友を失う、その現実を受け止められず、苦しんで、独りになっていた。

コツコツ。

「姉ちゃん……ご飯は？」

「……。」

そこには、ベットに背もたれて虚ろになっている姉がいた。部屋の光は携帯の画面だけだった。

克彦は静かにドアを閉めた。

少し肌寒い6月。姉は学校を休み気味になっていた。姉の事は心配しているが、学校を休むわけにもいかず普通に登校した。姉の事は心配しているが、学校を休むわけにもいかず普通に登校した。僕は姉ちゃんが気掛かりだったけど、学校を休むわけにはいかなかった。

友達がいない訳じゃない。学校に行けば話しかけてくれる人がいる。メールをすれば返してくれる人がいる。誘えば来てくれるし、誘われたら行くし、別に孤独な訳ではない。だけど、凄く寂しい。星花がいないだけで独りになった気分だった。別に一人じゃないのに。…死にたい。頭によぎる四文字の言葉。そう思うと、すぐにその思いを打ち消そうとした。独りで葛藤を続けた。

私にとって星花はどんな存在だったの……。どんなときも支えてくれた。どんなときも信じてくれた。どんな悩みも、愚痴も、何でも話せた。
私にとって星花は、私が一人になってしまうのを止めてくれた、唯一の友達だった。
そんな星花がいなくなってしまった。私は独りかもしれない。

姉は、相当あの星花さんとは仲が良かったみたいだ。
たった一人の友人を亡くしただけで、こんなに落ち込んでしまうのか。僕も亡くしたら泣くのだろうか。泣けるのだろうか。
僕には友達がいる。一緒に喋ってくれたり、遊んでくれたり、そんな友達がいっぱいいる。メールを送れば返信が来る。どこかに誘えば来てくれる。そんな友達はいっぱいいる。けど、友達を亡くしたとき、一番亡くしたくない人を考えたが、誰の名前も出てこなかった。
こんなこと考えても意味もないのに考えてしまう。こんな考えしてはいけないのはわかる。けど、一人になると考え始める。
僕は、本当の友達はいないだろうと。

私はずっと独りなのかな。一人のはずじゃないのに。でも、星花は大きな存在だった。
星花は私が一人だったことが嫌で、一緒にいてくれた。
私は、星花のためにも独りを考えるのはやめないと。星花の分も生きるのだから。

独りは辛いだけ。

いつも通りの時間（前書き）

書くのが遅くてすいません。後、へんだなってことを見つけたら言ってください。お願いします。

いつも通りの時間

「おはよう。」

上から降りてきた姉が言ってきた。

「おはよう。今日は起きるの早いね。」

「当たり前！今日は行くところがあるの。そのためにも準備しなくちゃ。」

「……でーと？」

「うるさい。黙れ。」

「そっそこまで言う？」

「久々のデートだから、着ていくものはしっかり考えないと。」

「ただ二人っきりで遊ぶだけでしょ？なのにそんな気合いいれ…ふげごっ！！！！！！！！！」

お腹を寝起きとは思えない剛力で殴られた。数分は動けなくなりそうなくらい。

「ふんっ！お子っちゃまにはわからないわょ。今日のところはみねうちならぬ、みぞうちで勘弁しとくわ！」

「なら、みねうちにしてくんろ……。」

「朝御飯食べるわよ！…克彦！そんなところで寝てないの。」

ママがバットタイミングで朝食の用意が出来たらしく、呻き倒れている姿のところに丁度呼びに来た。

「ねっ、姉ちゃんが…」

「いま行く！」

姉ちゃんに言い訳をかき消された。

「ほら。ご飯食べるよ！私はご飯の時間より、彼を考える時間が長くないといけないの！」

「なんだそりゃ……ボゴフッ！！！！！！！」

今度は頭にチョップされた。

姉に何があったかはわからないが、いつの間にか元気……とゆうか、むかつく姉に戻っていた。でもよかった。元気のない姉は見たくなかった。いつも通りの良丘家流井戸端会議ができて、なんだか安心した。

「雨やだなぁ。」

休日が終わり、学校に行くためバスに乗っていた。そのバスの中で克彦は呟いていた。

「あれっ？克彦！おはよう。」

「あっ。おっおはよう！」

バスの中が人でいっぱいで気づかなかったけど、おんなじクラスの野々井紳司（ののいしんじ）も乗っていたようだ。

「克彦がバスに乗ってるなんて珍しいな。」

「えっ！そうかな…。あっ雨の日には乗るよ。たぶん、なかなか会わないだけかも。」

「そっかぁ。まぁ、俺もあんまり乗らないんだけどね。あっ。そろそろ着くみたいだから…お金お金！」

おもむろに克彦に手のひらを向けた。

「えっえっ！！なっなに！」

「冗談だよ。ちょっとバック持ってて。」

「あっうん。」

紳詞は、よく冗談を言ってくるお茶目なめんもある人だ。

二人は目的のバス停に着き、お金を払ってバスを降り、バス停の屋根下に急いだ。

「あれ？紳ちゃん、傘は？」

僕は紳詞を紳ちゃんと呼ぶ。

「傘なんて別にいいやと思って。持ってこなかったけど…、結構降ってるね。」

予想以上に降りだしていた雨。バス停から昇降口まで傘なしでは、せっかくバスで来た意味がなくなってしまう。ぐらい、濡れるであろう。

「…傘、ないと濡れるかもね。……あのぉ」

「傘、貸してよ。この傘なら大きいし、二人は入れるっしょ。」

「えっ。……うん。入るかも。」

紳詞は克彦の傘を広げた。

「行こ！」

「ぼっ僕持つよ。」

「いいよ。俺傘借りてる身だし。……それに、お前が持つと低いか

ら顔に当たる……。」

「なるへそ…。」

二人で会話をしながら教室に向かった。一時間目は体育のようだ。

野々井紳詞は同じクラスの友達。部活はバスケ部。よくクラスでは克彦と話していることが多い。

「おはようかっくん！今日はちゃんと来たね。」

「ちゃんと来てる日の方が多いだし。」

教室に着いて、自分の席で色々準備しているとき、隣の春岬が話しかけてきた。

「かつひこぉ～！」

「あっ！おはよう！」

近くなのに少し走る素振りをして、叫んでいた。彼は鳳森哲（たかもりてつ）。いつも高テンションで、楽しい人だ。部活は演劇部。

「てっつん。この距離で走り込むことないよ…。」

克彦は鳳森を『てっつん』と呼ぶ。

「俺は……俺は夕日に向かって走るために、今も走る振りを！」

「チョップ！！！！」

ベシッ！

「あたっ！！！！！！！！！」

克彦は無表情でチョップした。

「ひどいなぁ～克彦は。」

「あんなこと言われたらチョップもするよ。」

「でも暴力はないでしょ。」

「そうだぞ。克彦！暴力反対だ。」

こっちに向かいながら，紳詞が克彦に言った。

「だって～。てっつん、変なことを……」

「でも、暴力はダメだぞ。」

「はい～。」

すねた感じで克彦は答えた。

「そうだ！しんじぃの言う通りだ！」

「わかったよ……。ってか、体育だから着替えないと！もぅ、十分しかないじゃん！」

話に夢中でいつの間にか時間がなくなっていた。

「マジだ……。」

時計を見て鳳森がボソッと言った。

「俺はもぅ着替え終わってるんだな。」

紳詞は胸を張っていった。

「……ずるすよ。」

「着替えてるのが普通だろ？早く着替えて行こうよ！」

「終わったぁぁぁぁ！」

「はやっ！」

振り向けばすでに体操着の鳳森がいた。

鳳森は紳詞と肩を組んだ。

「よしっ。行こう！」

「あっえっ？」

紳詞は少し驚いた。

「ちょっ、ちょっと待ってよ！」

体操着の片方の足に引っ掛かって、なかなか履けなくてピョンピョン跳ねながら克彦が言った。

克彦も準備が出来、体育館に三人で駆け足で向かった。

すべての授業が終わって、帰りの準備をしていた。周りがざわついていたせいで気付かなかったが、担任の勢木口が、大量のプリントを持って教卓に立っていた。

「はいっ。じゃぁＨＲ（ホームルーム）やるよ。高濱！それと……良丘！プリント配ってくれないか？」

「僕ですか？なんでまた。」

「嫌なら野々井に頼むけど……」

「わかりました！やります。」

先生の言葉を遮るような感じでハキハキ言った。

「おぅ…じゃぁ配ってくれ。」

「はいっ！……透。配ろじゃん。」

「配ろう。俺は右から配っていくことにするよ。克彦は左からお願い。」

「任せんしゃい！こんなのジョババ、って終わらすよ。」

「わかったよ。任せた任せた。」

高濱透（たかはまとおる）。彼はこのクラスの学級委員長。頭はすごくいい。部活は弓道部。

ＨＲも終わり、克彦はみんなと少し喋ってから、紳詞や鳳森を昇降口まで見送って、放課後の練習をするため吹奏楽部室へと向かった。

登場人物紹介　ｐａｒｔ１（前書き）

一話一話出すのが長くなってすいません。

登場人物紹介　part1

おはようございます（^□^）作者担当の魚類です。ではでは、今回はこの小説の登場人物を軽く紹介します。

主人公・良丘克彦
１６歳の高校２年生
身長　１５６センチ
体重　４８キロ
血液型　Ｏ型
部活　吹奏楽部・（科学部）
明るく天然でちょっと変わり者。ある悩みを抱えているがそれは秘密。これからは彼の言葉にも注目です。

克彦の姉・廣己
１８歳の高校３年生
身長　１６４センチ
体重　５２キロ
血液型　Ｏ型
部活　演劇部
ハキハキしていて気が強い。けど、相手思いの優しい人。とっても前向きで明るい性格。

克彦のママ・紗季子
４２歳の主婦

身長　１６２センチ
体重　４８キロ
血液型　Ｏ型
パート先　あるデパート
数年前、夫とは別れて女でひとつで二人を育てた。一応夫は二人の学費と、みんなの食費とその他もろもろ分は払ってもらえてる。

主なクラスメート達

野々井紳詞（ののいしんじ）
身長　１７５センチ
体重　７１キロ
血液型　Ａ型
部活　バスケ部
あだ名　紳ちゃん
いつも克彦と一緒にいる仲良し五人組の一人。克彦に対してだけ冗談やいたずらをよくやってくる。しっかりとしていて優しい。

鳳森哲（たかもりてつ）
身長　１７９センチ
体重　７８キロ
血液型　Ｏ型
部活　演劇部
あだ名　てっつん
いつもハッチャケていて、ありえないほど明るい人。仲良し五人組の一人。女の子の前では弱い。

宇田川孚（うだがわまこと）身長　１６４センチ
体重　６２キロ
血液型　Ｂ型
部活　ミステリー研究部
あだ名　まぁこ
一応副学級委員長。だいぶマイペースで少し不思議系。仲良し五人組の一人。

幕葉幸弘宣（まくばざきひろのぶ）
身長　１６９センチ
体重　６５キロ
血液型　ＡＢ型
部活　マンガ同好会部
あだ名　メィメィ
オタク。一人の世界に入ると危なくなる。ノリはよく、楽しい人。仲良し五人組の一人。好きな人はもちろん画面の中……。

高濱透（たかはまとおる）
身長　１６８センチ
体重　５８キロ
血液型　Ａ型
部活　弓道部
あだ名　トオルン
クラスの学級委員長。成績優秀で落ち着きがあって冷静ですごい。みんなをまとめるしっかりもの。

春岬美雪（はるさきみゆき）身長　１６１センチ
体重　５３キロ
血液型　Ａ型
部活　美術部
あだ名　みっちゃん
とても明るくて元気満々の女の子。席は克彦の隣なので、よく喋っている。

天渓玲香（あまたにれいこ）身長　１５８センチ
体重　６０キロ
血液型　ＡＢ型
部活　美術部
あだ名　れいちゃん
とても不思議ちゃんで笑いのツボは意味不明。理解できるのは仲の良い美雪だけ。

紺田彩紀（こんだあやのり）身長　１６６センチ
体重　６６キロ
血液型　Ａ型
部活　陸上部
あだ名　ノリノリ
みんなをよく笑わせているムードメーカー。克彦達とは違うグループだが、紳詞とは仲がいい。

卑猥綾（ひわいりょう）
身長　１６７センチ
体重　５３キロ

血液型　Ｏ型
部活　科学部
あだ名　特になし
いつも一人で暗いオーラを放っている。話しかけてもなかなか喋ってくれない。

犖園持剛牙（らくえんじごうが）
身長　１７４センチ
体重　５３キロ
血液型　Ｂ型
部活　野球部
あだ名　ごうが
克彦や彩紀らとは違うグループで、族に言うデシャバリグループの中心的存在。みんなはあまり好きな性格ではないみたい。

まだまだクラスメートはいるけど主要人物はこんな感じです。

先生達

克彦の担任・音楽・吹奏楽部の顧問
勢木口勉（せきぐちつとむ）
社会
守口明（もりぐちあきら）
数学

紅甘栗忠（くじゅうくりただし）

理科・科学部の顧問

頼模沖月（よりもしおきつき）

これよりも人物は出てきますが、ご了承ください。

放課後の吹奏楽部（前書き）

早く書くのができず、更新が3日以上かかってしまいます。すいません。

放課後の吹奏楽部

……放課後、克彦は吹奏楽の部活があるため音楽室にいった。

机の上に荷物を置いて、隣の準備室に克彦は入った。

「ヤポポスゥ〜！」

「……キモス。」

「キモスとはなんぞや！！」

軽快に入ってきた克彦に、後輩である一之瀬がきつい一言を言った。

「だって、ヤポス！って…。」

「ヤポスじゃなくて、ヤ・ポ・ポ・スゥだよ。」

「……キモス。」

「オイッ！」

その時横からなにかが走ってきて……

「克彦せんぱぃ〜！」

「おっ！来たんね…ラベラビっ！！！！！！！！！」

思いっきり飛び蹴りされた。

「なにをするか！」

「お主の悪行。私がすべてせいばいしたるわぁ！！！！！」

「なんだとぉ！……我こそ、あの伝説の戦士。…天災！！・アルマジ～ロだ！！！！！！」

「うるさい！！覚悟しろぉ！！！！」

「やられるかぁ！！！！！！！！！！！！」

二人は近くにあったぬいぐるみの長い花を手に取った。その長い花を剣のように構え、二人は睨みあっていた。

「いくぞ！アルマジロ！！！！」

「来い！奉行擬き！！！！」

長い花の刀擬きの刃先をアルマジロに向け、向かって行く奉行擬きの白裡（しらうち）。いざ、決戦！

「はいっはいっ。そこまでにして。楽器出して。」

と、谷羅戸先輩が言った。

「はぃ～」

二人の後輩と克彦は空気のような返事をした。

吹奏楽部員は全部で３４人いる。吹奏楽部は楽器ごとのパートで分けられる。克彦はチューバを吹いていて、パートはユーフォ、チューバ、弦バス（コントラバス）で構成されているバスパートだ。バスパートは全部で４人。先輩１人の後輩２人と克彦。だいたい、バスパートは変わり者が多いのでみんなで集まるとなにかが始まるのだ。

合奏場でみんな集まり、座って出鱈目に思い思い何かを吹いている。そこに勢木口先生が来て、指揮台の近くの椅子に座り指揮棒を手に取った。

「音やめてー。」

指揮棒を振りながら勢木口は言った。

「はぃ、こんにちは。」

「こんにちは！」

構えていた楽器を一斉に下ろしてみんな応えた。

「はぃ、じゃぁロングトーンからいきます。」

ポカッポクポクポク……

勢木口がハーモニーディレクターをいじくり、メトロノームでステレオを通じ四拍子のテンポを刻んだ。

「はい、ワン、ツー、スリー…スゥ〜」

ボーーーーーー。

拍の頭に合わせ八拍ずつべー音階で吹いた。

（つまんないなぁ〜。ロングトーン飽きるなぁ…。）

克彦は寝そうになりながら周りに合わせて吹いていた。

「……寝た？今、吹きながら記憶飛んだ！吹きながら僕寝たぞ！なのに、なのにしっかり吹いてる！すごい僕！」

なぁんて1人心の中で喜びながら吹いていた。

「お疲れさまでしたぁ〜。」

練習が終わり、片付けを終えてみんなで帰りの挨拶をした。

克彦はゆっくりバックを背負いながら、白裡と一之瀬と喋っていた。
「ねぇねぇ。なんだっけ？あのぉ～そのぉ～えっとぉ……サラウスイパートストッキングパレード？」
「サウスランパート・ストリート・パレードでしょ！」
白裡に力強く突っ込まれた。
「あぁ～！それそれ！あの曲面白かったよねぇ。」
「おもしろかった！吹きやすかったし。」
「でも、先輩吹けてなかったじゃん…。」
「うるさすぅ～！！明日は吹けるし。」
「期待してるよ……。」
「無理っしょ～。先輩じゃ。」
「任せんしゃい！たぶん吹けるよ……。よし！帰ろう！」
「帰れ帰れ！！！！！」
「ｙｏｕらも帰るんしょ！」

三人は階段を降り昇降口に行き靴を履いて、校門でまた話していた。

～話始めて一時間後

「うがッ！もぅ一時間経ってるよ！」

「まじだぁ～。」

「まぁあんなにしゃべってたし…。」

「もぅ帰ろっか。」

そう切り出したのは克彦だった。

「じゃぁ帰るべ！」

白裡が鈍り混じりで言った。

「うん。じゃぁねぇ。」

「さらばぁ。」

克彦と一之瀬は同じ方向で一緒に帰り、白裡は逆の方に帰っていった。

克彦は一之瀬を家の前まで見送って、そのまま帰った。

～克彦の今日の晩御飯～

・白いご飯
・白菜が入ってるお味噌汁
・ツナサラダにかにかま入れたやつ
・お魚焼いたやつ
・りんご
・プリン
・チョコパン

克彦は、今日配られた新譜のサウスランパート・ストリート・パレードを口ずさみながら寝た。

人物紹介Ｐａｒｔ２

今回は吹奏楽部編。
全員ではないですが、主要人物を紹介します。

・克彦のバスパート

谷羅戸凛々子（やらとりりこ）
歳　１８
身長　１６５センチ
体重　５４キロ
血液型　Ｂ型
あだ名　りりこ先輩
バスパートのパートリーダー。つまり長。克彦の先輩。みんなで楽しくやっていると思えば、いきなり練習モードに入るなどでみんな振り回されている。ユーフォを吹いている。ちなみに、アルマジロレッド。

一之瀬鈴（いちのせりん）
歳　１６
身長　１５８センチ
体重　５８キロ
血液型　Ａ型
あだ名　ぴーちゃん
克彦の後輩。楽器はチューバを吹いている。アニメなどが好きでよくみんなでその話をする。克彦とは家が近いので、部活終わりはよ

く2人で帰っている。ちなみに、アルマジロピンク。

白裡茉美（しらうちまみ）
歳　15
身長　152センチ
体重　44キロ
血液型　A型
あだ名　まみ～んとyou
克彦の後輩。楽器は弦バス（コントラバス）を弾いている。部活の中で唯一の弦楽器。克彦といるときは異様なハイテンションになる。ちなみに、アルマジロブルー。

鳳森由頼（たかもりゆより）
歳　17
身長　163センチ
体重　47キロ
血液型　O型
あだ名　ゆより先輩
部長。高3。そして、あの克彦と同じクラスの鳳森哲の姉。面白い性格でしっかりもの。楽器はクラリネット。

安羅秦子（あらはたこ）
歳　15
身長　152センチ
体重　46キロ
血液型　O型
あだ名　たこ

克彦の後輩。楽器はフルート。白裡ととても仲がいい。だから、よくバスパートにも遊びに来る。ちなみに、アルマジログリーン。

庭岳豊（ていたけみのる）
歳　１６
身長　１６６センチ
体重　５９キロ
血液型　Ａ型
あだ名　みの
吹奏楽でたった二人の男子の一人。克彦とは同級生で教室は隣。克彦とはもちろん仲がいい。楽器はトランペット。

衿山美一（えりやまみいち）
歳　１６
身長　１４９センチ
体重　４３キロ
血液型　Ｂ型
あだ名　いっち～
克彦の後輩。楽器はアルトサックス。一之瀬と仲がよく、彼女もアニメが好き。ちなみに、アルマジロゴールド。

まだまだいっぱい出てきますが、それは話上で説明します。

～天災！アルマジーロ！

正義の見方。アルマジーロ。それは、天災で相手をやっつける戦士だ！

「あっ、アルマジーロ！後ろから大岩が！！！」

「気にするな少年！これは攻撃だ！」

と、言うなり転がってくる岩をスルリと避ける。

「なんだと！くそぉ、アルマジーロめぇ！！！！！」

怪人・カバカバルンに大岩ドーン！

「すごい！アルマジーロ強い！！！」

「天災は……勝つ！！！！！！！」

と、バスパートによって創られた妄想戦士のことです。

天災戦士！！（前書き）

書くのがまた遅れてしまいました。すいません。

天災戦士！！

『

コツコツコツコツ……。

月明かりに照らされた人っ気のない怪しげな道。そこを赤いハイヒールを履いた女性が歩いていた。

「早く帰らないと…。ここ、ちょっと気味悪いわ。」

早足で家に帰ろうとする女性。

プルルルルル……

「！！！」

彼女の携帯が鳴った。

「なんなの……ちょっとビックリしたじゃない。」

突然の電話に驚きながらも、少し安心感を感じて電話にでる女性。

「もしもし。……えっ、今？ごめ～ん。まだ家帰ってないからテレビ見てないよ。……うそっ！あの人でてるの！！見たいよ！！！」

歩きながら友達と電話で話していた。

「今日そんなおもしろいの？早くみたいなぁ。でもまだ家に着かないし。後十分くらいかか……」

ザーーーーー。

「あれ？もっ、もしもし？」

突然のノイズ音に会話が途切れる。

「……（電波悪いのかなぁ？）もしもしぃ？」

「……ぁぁぁ……」

「えっ！」

ノイズの合間に返ってきた応答は、友人の声ではなかった。

「……だっ、大丈夫？」

「……ぁぁぁぁぁ…」

「……ともみじゃない！」

携帯を見て、少し怯えながらも話しかけた。

「もしもし！どなたですか！？」

「……あああああああ」

「きゃぁぁぁぁぁぁ！」

携帯から低いような声が聞こえ、叫んだ。

「あああああああああ」

「いやぁぁぁぁ」

腰が抜けて、足を引きずるように携帯から離れようとしている。

「あああああ」

「！！！！」

声が携帯からではなく、後ろから聞こえた。

「あああああああああ」

近づいてくる謎の人物。暗くてほとんど見えない。

「来ないでぇ！」

しかし、彼女は腰が抜けていて動けない。

「あああああああああ」

女性に徐々に近づく。

「たっ、助けてぇー！助けてぇーアルマジーロ！！！！」

その時だ！

「とう！！！
バシッ！！！！！！！！！
「うがぁぁぁぁぁぁ！」
倒れる謎の人物。
「あっ！あなたたちは！！」
そう言ったとたん、周りがいっきに明るくなった。
「我々が来たからには、もう大丈夫ですよ！」
そのとき！！
ブン！！！
「危ない！！！」
間一髪で女性を護った。
「……きっ傷が！」
女性を抱えている片方の腕から血が……
「これくらい平気さ。……くそぉ。よくも彼女を脅かしてくれたな！怪人・カバカバルン！！！！」

「これはお前たちを呼び出すための作戦なのさ。アルマジーロよ！」

「許せない……そのためだけに彼女に彼女に怖い思いをさせるなんて！お前を倒してやる！！よしっ！みんな、変身だ！！！！！！！！！！！！！」

「おぉ！」

リーダーらしきアルマジーロがそう言うと、他の四人が答えた。

「よしっ！……変身！！！！！」

その掛け声と共に、五人が光だした。

ピカー！シュバシュバシュバシャキーン！

「とうっ！！！！！」

スタッッッッッ！

「炎の破壊神！アルマジローーーレッド！！！」

「ポセイドン率直の使者！アルマジローーーブルー！！！」

「蒼空から舞い降りし稲妻！アルマジローーーイエロー！！！」

「ご機嫌ナナメのいたずらっ子！アルマジローーーグリーン！！！」

「華より産まれし小悪魔！アルマジローーピンク！！！」

「正義を思い、悪を撃ち破る！」

「正義が求められる限り……」

「助けを求められる限り……」

「この体が朽ちかけようと……」

「みんなをこの手で護る！！！」

「我ら！！五人揃って！！！…天災！！！！ア～～ルマジーロ！！！！！！！！」

５人が綺麗に決めポーズ。

「今日こそアルマジーロに終止符をうってやる。ゆけぇ！シマァシマ！！！」

「キー、キー！」

命令と同時に、シマァシマが３０体近くどこからともなく現れた。

「お前の終止符をうってやる！……我々の後ろに隠れていてください。」

レッドが女性に言った。

「行くぞみんな！」

アルマジーロとシマァシマが戦い始めた。

「やっ！はっ！……エレクトリックアルマジロ！！！」

バリバリバリバリ

「キーキーキー……」

イエローから電気が飛び交い、シマァシマは叫びながら消えてった。

「あぁ…一体一体やっつけてもキリがない……フラッドアルマジロ！！！」

ザブーン

「キーキーゴポポポ……」

ブルーの波に飲み込まれ、シマァシマは溺れていった。

「ピンク！危ないぞ！」

「えっ、ちょ、待って！」

そうゆうとレッドの身体が燃えだした。

「おぉ〜〜〜……フレイムアルマジロ！！！」
レッドの身体から前方に向かって、炎の渦がでた。
「キー……」
燃えて灰になった。
「じゃぁ私も……ソーンアルマジロ！！！」
「キーーーー？……グサッ」
シマァシマが気付かない内になにかに刺されていた。
「うわぁーざったい！ちょっと多すぎ…はぁ〜……ミスチフアルマジロ！」
「キー？キーーーキッキッキッ」
背中がゾワゾワしたのか、シマァシマが笑いだした。
「これで、終わりかな？」
「キーーーーキキキ……」
笑い死にした。
「みんな大丈夫か！……よし、覚悟はできてるな。カバカバルン！！！！」

「うっ……くそぉ！今日のところはこれぐらいにしてやる……。」

バサッ

「あっ！待て！！」

レッドが手を伸ばしたときには、すでに消えていた。

「また逃げられた……。」

ブルーが悔しそうに言った。

「あっ、ありがとうございます。護っていただいて……。」

「これぐらい普通ですよ。護るのが我々の役目ですから！」

イエローが女性に向かってガッツポーズしていった。

「よぉし……天災正義は…………今日も勝つ！！！！！！！！！！！」

レッドの掛け声の後、全員で言った。

そして、アルマジ～ロ達と女性は暗闇に消えていった…………………………』

～～～～～～みたいな夢を今日見たんよ！」

吹奏楽の朝練の合奏前、克彦がみんなに、克彦が見た夢の話をしていた。

「どぅよ！すげくなさすか？」

克彦は谷羅戸先輩に問いかけた。

「よくもまぁそんな夢を見れたこと。」

「ｍｅ達夢にでたん？」

すかさず白裡が言った。

「でたよ！しっかり戦ってたし。」

「……出演料…。」

一ノ瀬が、サッ、と手を差し出した。

「そうだよ！出演料払えや！」

「せやで！払わんとあんさんの体、どないなってもしりまへんで！」

谷羅戸先輩の言葉に乗って、白裡がヤクザ擬きで言った。

「そんな金、払えへんなぁ～。」

克彦がノリに乗る。

「払えや払えや！」

白裡と一ノ瀬に催促される。

「よし！克彦、後で出演料ね。……ってことで、楽器だして練習して。」

「はひぃーーーー。」

三人で空気が六割の返事をした。

「金ぇ～～～～！！！！」

「ぬぁぁぁ！！！！」

合奏が終わって楽器を片付けた後に、白裡に襲撃された克彦。

「主さぁ、どんだけ金によくあるんよ。」

「貰えるもんは貰っちゃる精神よ。」

「あげないから！」

その後も、階段で教室に行くために別れるときまで金金言われ続けた。

キーンコーンカーンコーン。

授業前の呼び鈴が鳴った。

「あぁぁぁぁ。もぅ疲れた…。」

制服の裾をいじりながら、廊下を歩いていたときについ、克彦は言ってしまった。

ガラガラガラ……

克彦が教室のドアを開けて入った。

（あっ、もぅ紳ちゃん来てる。）

「あ……しっ……てっ、てっつんおはよう！」

少しためらって鳳森に話しかけた。

「おはよい！克彦！」
「おはよい、とか。なんだし～。」
鳳森と克彦が話しているとき、背後から紳詞が話しかけてきた。
「おはよう。」
「おはよう紳ちゃん！」
「紳詞来たらテンションあがったなぁ…。」
「えっ！そんなこたぁないっしょ。」
「いや、あるべ！！」
「ないぃ！別に紳ちゃんが来たっからったって…」
「なに噛んでるんだよ。……焦ってる？」
「焦ってない！！！！」
「まぁまぁまぁまぁ。」
「落ち着いて。」
「言われなくたって落ち着いてますし……。」
「……フフッ、克彦ウケるわ～。」

紳詞が笑った。

「ウケないでしょ！」

キーンコーンカーンコーン

「ベル鳴ったから席着こうぜ。」

「おっ、あっ、ぅうん。」

克彦の肩をポンッと両手で押しながら紳詞が言った。克彦は静かにゆっくり座った。

「唐揚げ頂戴よぉ～。」

「い～やだ！！紳ちゃんのお弁当にも入ってたじゃん！……って、どさくさに紛れててっつんも食べようとしない！！！」

「へへへっ。バレたか。」

「いいじゃん。一つぐらい…。」

「えっ……一つぐらいなら……いいよ？」

「なぜ疑問系？冗談だよ。本気にするなよ克彦。」

「ほっ、本気にしてないし！でも、別に唐揚げの一人や二人、ｍｅは寛大な心持っちょるからいいのさ！！」

「じゃぁくれ。」

「もぅあげないもん。」

「矛盾だぁ克彦よ。」

「うるたい！黙っちょれ鳳森ドン！」

「ドン……って。」

「皆の殿。ジュース買いに行こす。」

幕葉幸がみんなを誘った。

「よぃよ。けど、食べ終わるまで待ってちょ。」

「大丈夫。待つから。」

ちょっとして克彦は食べ終わってみんなでジュースを買いに行った。

キーンコーンカーンコーンキーンコーンキーンコーン

授業終わりのチャイムが流れた。

「あぐぅ～……眠いｚｚｚ」

「かっくんちゃんと寝てるの？」

「寝てるけど眠い……。」

「なにそれ？寝てて眠いなんて。」

「なんか眠いんだよねぇ。」

「克彦はただ疲れてるだけでしょ。みっちゃん、部活行こう。」

天渓が春岬に話しかけてきた。

「うん！いこいこ。あっ、じゃぁねかっくん。また明日ね！お家帰ったらしっっっかり寝るんだよ。」

「うん。がんばるぅ～。でわでわぁぁ。」

手を振りながら春岬と天渓が教室からでていった。それと同時ぐらいに、紳詞と宇田川と鳳森が克彦のところに来た。

「克彦。部活だろ？オレも部活だから途中まで一緒に行こうぜ。」

「あっ、行こすぅ。でも、今日我は部活無さすよ。だからそのまま帰りかも。」

「いいなぁ。オレは今日も走ったりするよ……。」

「オレも夕日に向かっウガッ！」

宇田川が頭を叩いた。

「鳳森は劇で走るんだろう。なんかの役としてさ。」

「そうそう。紳ちゃんとてっつんの走るは違うのだ。」

「とにかく行こうよ。井戸端会議してないでさ。」

「井戸端会議は僕んちの特権だよ。」

「いいから行こう。」

「はぁ～い。行こす行こす！」

４人は仲良く喋りながら歩いた。

トントンガッ！トントンガッ！

靴のかかとをしっかり履いて用意が出来た克彦は昇降口を出た。

「みんな部活だから帰るの一人だぁ…。（なんか寂し。……宿題しなくちゃ…。眠い。ゲームしたいなぁ。お腹減ったなぁ。今日テレビ何やるかなぁ？一人暇だなぁ…。なんかパフェ食べたいなぁ。

バナナがいいな！生クリームとか……コーンフレークいらないな。
といっても仕方ないし……ご飯まで二時間くらい。帰って明日の用意して、電気つけて、色々やって約３０分くらい……帰る時間入れても、ご飯までの一時間ちょい暇だなぁ。……一人暇だなぁ。）
……おょ？アレはもしや綾君？……だ！そうだありゃそうだ。
お～い綾く～ん。」

克彦は大声で手を振りながら卑猥（ひわい）を呼んだ。

「お～い。綾君！帰る道こっちなの？一緒に帰らない？」

「えっ…うん…。」

明るく誘った克彦とは裏腹に、卑猥は少し暗めだった。

「へぇ～綾君帰りこっちなんだぁ。あれっ？今日科学部あったりしたっけ…？」

「部活あったら僕帰ってないよ…。」

「……あっ、そっそうだよね。ごもっとも！いやぁはは。…今日は元気ないね？」

「いつものこと。」

「いやいや、いつものこととか…。いや、なんか今日は暗いなぁって。どぅした？なんか点数悪かったん？」

「別に……なんでもないよ。」

「…そっっかぁ…（やばいかも。シラケちゃう。）…あっ、そういえばドラマとか見たりする？今流行りの……『不完全燃焼先生』とか！」

「見ない。」

「あっ…見ない……。あれは。あのぉぉぉぉ『無機物人間・ＬＴＫ』とか」

「見ない。テレビは見ない。」

「そうなの！テレビ見ないの？」

「悪い…？」

「いや…そうゆう訳では……。」

話の返しが淡白すぎて話しが進まらず、とうとう一緒しらけた。

「えぇ……あぁ……ん～……好きな人とかいないの？」

「いないよ。」

「いないの？いそうなのになぁ。」

「いなくてごめん。」

「いや…そんな……。」

「克彦くん…。」
「んっ！なになに！？」
「逆に聞くけどいるの？」
「えっ！ななにが！？」
逆に質問されるとは予想外だった克彦は焦った。
「好きな…人。」
「いっ……いいいないよ！まさかぁ…。僕、いると思う？」
一瞬焦る克彦。
「さぁ…。」
「だよね……はぁ。」
「噂で聞いたことあるから、気になって……。」
「噂？どんなん？」
「克彦くんが……。」
「僕が？」
「……やっぱやめとく。」

「そこまで言っといて言わないとか！？」

「ごめん。言いにくい…。」

「そっそっかぁ……。まっまぁいいけど……。」

この後も一方的に克彦が話して、卑猥が淡白な返しをしながら一緒に帰っていった。

「あっここ右なんだ。僕左！」

「そぅ。じゃぁね、克彦くん。」

「じゃぁね！綾君！」

克彦は大きく手を振って、卑猥はそれを見もせず帰っていった。

その夜……

お風呂にて…克彦は湯槽に浸かっていた。

「今日は宿題やらなかったなぁ。明日やろうっと。はぁ……今日はなんだか疲れたなぁ……。―さかなさかなさかなぁ～さかなぁ～を～食べ～るとぉ～」

克彦は陽気に歌っている。

歌いながら……

（そういや、噂ってなんだろう……。なに言おうとしてたんだろう。やっぱ気になるなぁ。明日聞いてみようかなぁ……やっぱなんか怖いなぁ。）

噂が気になってる克彦だが、思い当たる節がないわけではなかった。けど、それは克彦にとっては自分でも認めたくないようなやつだった。卑猥が言おうとした克彦の噂と、克彦の思ってる噂がもし一致しているなら、卑猥が言えなかったのもなんとなくわかった気がする克彦。たぶん、クラスの何人かは、聞きたいけど聞けない、なんて人が他にもいるはずだろうと考えていた。

過去に一度だけ聞かれたことがある。でも、そのときは違うと答えた。その答えを聞いて、その友達はホットしていた。そのせいか、もうその噂は認めたくなくなった。事実だと告げたら、壁ができる気がしたからだ。

「ん～眠いなぁ。今日も楽しい夢、見れるといいなぁ。」

アルマジ～ロの夢は傑作だったので、夢を見るのが楽しくなった克彦だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7984f/

自分に正直に

2011年3月30日06時53分発行